2026.11.17

【2026 年度岡本ゼミによるウガンダでの海外フィールドワークの成果報告】

政策学部岡本由美子ゼミは 2011 年度以降、ゼミ活動の中心に海外フィールドワーク（FW）を据えて来ました。2020 年度から 23 年度はオンライン上での海外 FW でしか実施できませんでしたが、今年度は、2024、25 年度に続き、現地で海外 FW を実施できました。2026 年度 10 月 31 日（土）の午後 3 時から午後 5 時 30 分まで、同志社大学今出川キャンパス至誠館 23 教室で報告会を開催致しましたので、以下、その概要をまとめます。

冒頭、岡本より、ゼミのテーマ、特徴、及び、今年度のゼミ活動の概要を説明した後、まずは、ウガンダに関連する 5 つの班（JICA の技術協力プロジェクトである北部ウガンダ生計向上プロジェクト【NUFLIP】班、IT 班、日本の NPO の一つでグルで活動を行っている認定 NPO 法人テラ・ルネッサンス班、コーヒー班、エコツーリズム班）からそれぞれ、12 分ずつ、発表を行いました（今年度の海外 FW のスケジュールに関しては、文書の最後の補足欄をご覧下さい)。今年度はこれまでと異なり、コロナ禍以降、JICA がグローバル・アジェンダとして打ち出している、IT 分野での国際協力を調査する班も単独で立ち上げました。

最初の報告は NUFLIP 班からでした。本年度も 2 つの農家グループを訪問しました。今年度は既に NUFLIP は終了していたため、NUFLIP の効果が農家グループにどの程度、浸透しているのか、について主に調査を行いました。直接的、間接的介入を問わず、NUFLIP の農民の方々の満足度（Well-being）を高める効果を確認できたことが何よりの成果でした。ただし、この人間の幸福向上を目指した、新しい野菜栽培技術やその販売方法を伝授する NUFLIP アプローチは、ウガンダ北部のすべての農民にまだ届いているわけではありません。非 NUFLIP 農家にどの程度浸透するのか、今後も推移を見守りたいと考えます。

次は、IT 班からでした。JICA はコロナ禍を経て、IT 分野への技術協力提供を本格化しました。今年度は、ウガンダの IoT Hub に JICA から派遣されている日本人の長期専門家、及び、JICA ボランティアで一度ウガンダの水資源プロジェクトに従事した経験をお持ちで、後に、IT 技術を活用し、地域で使用されなくなってしまった井戸の水資源管理方法を確立した日本人起業家を訪問しました。日本人の長期専門家の方は、IoT Hub でウガンダ人の起業家の育成に従事しつつ、日本の企業とのビジネスマッチングも行い、官民連携を通した新しい技術協力の形であることが見てとれました。また、元 JICA ボランティアの方が現在、ウガンダで、IT 技術とビジネスを駆使して水資源管理の確立に寄与し、その結果、地域の人々の暮らしの改善に大きく繋がっているのもまた、日本の官民連携を通したウガンダへの貢献と言えましょう。

第 3 番目の報告は、テラ・ルネッサンス班からでした。今年度もまた、同 NPO 法人海

外事業部長、かつ、グルの事業所の所長さんである小川真吾氏、及び、元子供兵の方々へのインタビューを通して、同 NPO 法人が何故、元子供兵の社会復帰支援で成功を収めているのか、及び、同法人の今後の課題を明らかにしました。今年度は、２つの新たな発見がありました。一つ目は、フォーマル、及び、インフォーマルを含めて、極めて丁寧に元子供兵の方々に心理的ケアを行っていることであります。とりわけ、シングルマザーとなって帰還することが多い元少女兵の方々への支援は手厚いものでした。2 つ目は、‘正義’の捉え方です。元子供兵の方々は多くは被害者である、とともに加害者でもあります。このような場合、何が‘正義’であるか、特定化するのは難しいのが現状です。必ずしも、西洋諸国で言われるような‘グローバル正義’の考え方だけで物事を解決できるわけではない、ということです。ただし、同法人も帰還兵の社会復帰を行う上で課題がないわけではないことも明らかとなりました。資金・人材両面でのやり繰りは決して楽ではありません。我々ゼミでできることがあるとすれば、このような北部ガンダで学んだことを日本人の多くの人々に発信し、少しでも同 NPO 法人が抱える課題の解決に貢献をすることである、という結論に達しました。

第 4 番目の発表は、コーヒー班である。コーヒー業界では、コーヒーの 2050 年問題は現在、大きく取り上げられています。本有機コーヒー農家組合がこの気候変動問題にどのように取り組んでいるのか、インタビューを行いました。また、女性コーヒー農家組合は男性コーヒー農家組合に比べると、所得・資産保有レベルが低く、より深刻な影響を受けやすいため、同組合内で女性のみで構成する団体を結成しました。その活動内容についても伺いました。

本コーヒー組合はフェアトレード（FT）団体でもありますので、気候変動問題に対処する様々な方法に関する情報については、東アフリカ FT を通じて入手できていることがわかりました。しかし、長らく、コーヒーの有機栽培方法や FT の基準を順守することが求められてきましたので、ある程度、緩和策や適応策については既に実行に移している内容もあることもまた、明らかとなりました。

今年は、女性組合員が女性限定の団体を結成して、どのような活動を行っているのか伺えたのが一番大きな収穫でありました。彼女たちは、コロナ禍の時期に第 2 の収入源をつくるべく、ハンディクラフト生産を開始しました。しかし、その活動は益々、拡大と深化を遂げています。まず、団体に所属する人数です。現在の組合に所属する女性農家数は 300 人を超える数ですが、その中で同女性団体にも所属する数は 100 人以上に達しました。

また、活動内容も深化しています。ハンディクラフトのトレーニングを新しいメンバーに対して行って生産能力を増やしたり、町でのショップ開設によってハンディクラフトの販売額の増加を視野に入れて動いてもいます。また、ハンディクラフトの販売によって得た利益は、個々の組合員に返すのではなく、それを原資にしてマイクロファイナンスを行い始めていることも明らかとなりました。女性組合員全体で行う一種のリスクヘッジで

す。男性組合員に比べると所得レベルが低く、男性組合員のように市場で保険商品を購入する事はできません。その代わりに、有事の場合は女性組合員全体でリスクヘッジを行っていると言っても過言ではありません。これも一種の、気候変動対策（適応策）と言えなくもないです。

さらに、ＤＶに関する相談窓口を設けています。また、ハンディクラフトに加えて、自分たちの土地で野菜栽培と販売を行い、共同で第３の収入源獲得に向けて動いているのです。団体の結成を通じて、新たなビジネスの創出とローカルコモンズの形成を同時に行っています。まさに、女性組合員の活動はレジリエントで持続可能な社会構築を行っているといえます。組合への加入を通して実現した女性エンパワメントと主体性（エージェンシー）の獲得は、個人、及び、社会全体のウェルビーイング向上に大きく寄与していることが明らかとなってきました。

最後は、エコツーリズム班からの発表でした。現政権は４つの産業振興を行っていますが、その一つがエコツーリズム（サステナブルツーリズム）の振興です。エコツーリズムはツーリズムという手段を使って、環境や地域文化の保全と地域開発の達成を目指すものであります。今年度は、ゼミで初めて、地域住民主体でハシビロコウ観察で世界的に有名なマバンバ湿地で推進されているエコツーリズムと、国主導で動物保護と開発が同時に進められているマーチソンフォールズ国立公園でのツーリズムを比較しながら、エコツーリズムの可能性と課題を明らかにしようと試みました。野心的な取り組みでありました。

長年、マバンバ湿地のエコツーリズムに参加して感じてきたことは、活動の目線が地域住民主体となっている事は素晴らしいですが、主催団体のガバナンスに問題があると思われ、なかなか、思ったような成果が上がっているとはいい難い事です。2025 年度、国際機関からの資金援助の獲得に成功し、湖畔でのコーヒーショップの建設が決まり、変化の兆しがあるものの、真の持続可能な開発に向っているのかは判断が難しいところであります。

一方、国立公園の方は、国が主導しているだけあって、公園内においての環境整備はしっかりされているといえます。また、政府機関（UWA）主導の下、適切な訓練を受けたレンジャーがツーリズムの振興においてある一定の役割を果たしていると言えます。動物保護の観点からしても、UWA は成果を挙げていると言えると思います。しかし、ＵＷＡ側と地域住民の考え方において隔たりが大きく、エコツーリズムと呼ぶには程遠い現状が存在していることも明らかとなりました。その大きな理由の一つは、国立公園の振興から得た収益が地域住民には実質的にはあまり届いていない事でした。地域住民は動物が自身の農家の畑を荒らすことも手伝って、国立公園でのツーリズムの振興によって生活水準が高まってはいない、ことに不満を感じているのではないか、と思われます。一方、ＵＷＡ側は、地域住民が何故、違法とわかっていても公園内で密猟を行うのか、に悩まされています。

いずれにせよ、ウガンダはツーリズムによる生計向上の余地が高いと考えられますが、

その推進方法において改善の余地が大きく残されていることが明確となりました。

本分野の専門家に多数お集まりいただいて、ゼミ生が行ってきた活動成果を報告でき、かつ、それに対する忌憚のないコメントを専門家からいただけたこと、本当に良かったなと思います。また、今年度は、発表会を開催する教室に、ゼミ卒業生も多数聴講に来てくれて、とても嬉しかったです。今年度も無事、成果報告会を終了できましたことを、報告申し上げます。

（文責：政策学部教員　岡本由美子）

付録資料

2　2026年度ウガンダ海外FWの概要（2026年9月3日～9月15日まで実施）

日付	曜日	地域	ウガンダにおける訪問機関	協力・ビジネス形態
9/4	金	首都カンパラ	JICAウガンダ事務所、 ICT-HUB Sunda Technology Global Ltd	ODA Social Business
9/5	土	ワキソ	マバンバ湿地エコツーリズム協会(MWETA)	Trade (CBO)
9/7	月	ムバレ	ブフンボ有機小規模農家組合(BOFCS)	Fairtrade
9/9～11	水～金	グル	北部ウガンダ生計向上支援プロジェクト(NUFLIP) 認定NPO法人テラルネッサンス・グル訓練所 グル大学IPSS	ODA NPO Public University
9/12～13	土～日	ウガンダ北西部	マーチソン・フォールズ国立公園	Trade (State)
9/14～15	月～火	首都カンパラ	マケレレ大学、在ウガンダ日本大使館	Public University Japanese Embassy